

面と向かって父と話したことはなかったが、自然災害の被災者への公的支援法成立に向けた運動にかかわる場に連れ出してくれたのは、父による無言の教育だったのかもしれない。

父は、少年時代の個人的体験を家族に（少なくとも子どもに）語ることはほぼなかったが、その体験をもとに書いた自身の小説がある。父は本を出版するたびに母と私に（中学生の頃から）一冊ずつ渡してくれていた。2003年に出版された『子供たちの戦争』では、扉のページに私へのメッセージを残している。

ならへ。アップ（父のことである）は、大きく言って、このような子ども時代を通過して生きた。この一冊をお前に。

2003年7月9日夜『子供たちの戦争』はフイクションでありつつも、父のメッセージのとおり、子ども時代の体験が投影されたものだったのだろう。いま、私が「大人」

の立場になってから読み直すと、当時の無邪気な子どもたちが生きる戦時下の社会の残酷

さや恐ろしさが一層胸をつく。

父には長らく（おそらく亡くなるまで）五感すべてに空襲体験が染みついていたと思われる。何かが発火したニュースを見たときだっただろうか、何よりも爆風が猛烈で凄まじいと教えてくれた。空襲や爆発に遭ったときには頭だけでなく、目・耳・鼻すべてを指でしっかりと押さえなければならぬのだと、そのやり方を見せてくれもした。食料不足の少年の身体が爆風や振動を全身で受けていた衝撃はいかほどだろうか、いまとなつては考えさせられる。

何より、父のなかでは空襲での「におい」の記憶が強烈だったようだ。空襲で物が焼ける臭いではなく、死体や死体が焼けるにおい、あるいは、それらが長らく放置されたにおいである。空襲のあとのこうしたにおいは、「鮭の缶詰」に似ているらしい。食べ物が好き嫌いがなく父でさえ「これだけ

は無理だ」と言っていたことが思い出される。その体験からか、空襲にとどまらず、なにごとくも、もつとも想像しにくいものが「におい」だと言っていた。さらに、視覚・聴覚的な体験を享受できる技術が進歩しても、「におい」の再現は難しいだろうと語ってもいた。

父は、常に自身の小さな体験と「大人向け」の構造的な問題とを往還させながら思考を積み重ねていた。そうした姿は、子どもから見れば、非常に強く頼もしいものであった。しかし、いまこうして『子供たちの戦争』とともに父から聞いた体験をふり返ってみると、違った印象を受ける。当時彼が全身で受けた傷は、子どものころの私が想像したよりももっと深いものだったのではなからうか、と。

（おだ・なら／大学教員、写真提供も筆者）

## 帝銀事件と日本軍の秘密戦部隊

### 占領政策の分岐点

はじめに：帝銀事件捜査から見えてくるもの

帝銀事件は、その事件の残酷性とミス터리性、そして冤罪、未曾有の人権侵害と

山田 朗

いう観点から長年にわたって論じられてきた。私は、当時捜査にあたった警視庁捜査一課の係長・甲斐文助の捜査手記の分析した『帝銀事件と日本の秘密戦』（新日本出版社



2020年)において、この事件と捜査が、占領政策の分岐点を形成し、戦前と戦後をつなぐ役割を果たしたものととして検討した。

「占領政策の分岐点」とは、それまでの民主化と非軍事化から反共の防波堤への分岐ということ、具体的には、戦犯(戦争責任)追及から戦犯免責(戦争責任不問)というフェーズへの移行ということである。後述するように帝銀事件とその捜査は、占領政策の移行を水面下で進行させた。占領政策の転換は、翌1949年のドッジラインによって可視化され、国鉄三大怪事件(下山事件・三鷹事件・松川事件)によって顕在化されることになるのだが、地殻変動は帝銀事件当時確実に進行していたのである。

また、この事件と捜査が、「戦前と戦後をつないだ」というのは、戦前の日本軍の秘密戦(毒ガス・細菌・謀略など)の情報と人脈が、米軍によって保護され、戦後の冷戦の中でこれらが活用された、ということである。

ここでは、帝銀事件とその捜査について、主に「占領政策の分岐点」と「戦前と戦後をつないだ」という観点から検証し、現代における戦争犯罪と戦争責任追及のあり方について考える材料を提供したい。

## 帝銀事件とその捜査とは

まずは、帝銀事件とは何であったのか、

という所から説明する必要があるだろう。帝銀事件は、1948(昭和23)年1月26日(月曜日)に起きた銀行強盗殺人事件である。東京都豊島区の帝国銀行椎名町支店の行員など12名が毒殺され、現金・小切手(合計約18万円・現在の貨幣価値で約500万円)が強奪された。

その際、犯人は、窓口業務終了直後に一人で銀行に現れ、近所の具体的な場所を示して集団赤痢が発生したこと、実在の米軍将校の人名を出してGHQの消毒班がそこまで来ていること、事前に「予防薬」を飲んでもらおうと言つて、自分もそれを飲んで見せ、用意させた茶碗に手際良く「予防薬」をピペットでつぎ分け、行員たち16名に一齐に毒物を飲ませた。4人の生存者の証言から犯人の年齢(50歳前後)・背格好(Hotdogの中肉)・髪型(短髪白毛交じり)・胡麻塩頭・人相(好男子)などは明らかになったが、物証が何一つなかった(物証は類似未遂事件で使われた名刺と本件で換金された小切手の裏書きの文字くらい)。

事件当日、目白署に特別捜査本部が設置され、以後、警視庁の総力をあげた捜査が行われる。帝銀事件の捜査は、①特捜本部主力と②特捜本部名刺班(班長名から「居木井班」とも呼ばれた)、さらには特捜本部とは別建の③秘密捜査班(刑事部長からの特命によつ

て設置され、班長名から「成智班」とも呼ばれた)の3つ部署が進められたが、①が警視庁捜査一課と所轄警察署の専従捜査員数十名から成っているのに対し、②は十名程度、③は数名の規模であった。

実は、帝銀事件には事件後に判明した未遂(疑似)事件が2件あった。ともに人的・金銭被害はなかったため「事件」としては捜査されていなかったが、2件とも銀行員らに感染症の予防薬を飲ませようとしたという点で帝銀事件との類似性が注目され、特捜本部は、これらの「事件」も同一人物による犯行とみなした。そのうち、最初の類似事件であった1947年10月14日の安田銀行荏原支店では、犯人は「厚生技官 医学博士 厚生省予防局 松井蔚」と記された名刺を残していた。松井蔚は実在の人物で、この名刺も松井本人が作り、挨拶を交わした相手に配った物の1枚であった。帝銀事件自体ではないものの、この「松井蔚名刺」は帝銀事件の数少ない有力な物証とみなされた。秘密捜査班の成智班長も早速、松井本人に取調べを行なった。松井自身には帝銀事件当日のアリバイがあったが、特捜本部に寄せられた投書から、松井が戦時中、南方軍防疫給水部に属し、ジャワで現地住民を注射で二百数十名殺害した、という情報も寄せられていた。取調べの模様

を成智は、次のように回想している。

一月二十九日、松井〔蔚〕博士は特捜本部の要請で、上京した。私はその日、藤田刑事部長の特命を受けて、世田谷下北沢の実弟宅に泊まっている博士を訪れ、夜八時ごろから取調べを始めた。博士は、私の質問に頭をさげるだけで、何も答えなかった。……土人の殺害の件は、チブス予防薬と破傷風菌を間違えて注射した過失であると、弁解した(1)。

松井自身は、シロとされたが、松井が所属していた防疫給水部という組織については、この後、秘密捜査班だけでなく特捜本部主力も追及していくことになる。また、肝心の「松井蔚名刺」については、松井自身がいつ・どこで・誰に名刺を手渡したかを記録していたため、特捜本部名刺班が編成されて名刺の行方が徹底的に追及された。この「松井蔚名刺」を受け取った一人が画家・平沢貞通であった。名刺班は、特捜本部主力とは別行動をとって独自の捜査を行い、8月21日に小樽で平沢を逮捕した。逮捕の根拠は、「松井蔚名刺」の所持(類似事件で使用したとみなされた)、事件当日のアリバイの不明確、過去に銀行で軽微な詐欺事件を起こしていること、事件直後に被害額相当の金額を預金していることなどであった。

東京に護送されてきた平沢の面通しが行われたが、帝銀事件生存者などで、平沢を犯人であると断言した目撃者はいなかった。しかし、検事による執拗な取調べの結果、平沢は、逮捕1ヶ月後に犯行を「自白」したものの、その後の裁判では一貫して無実を訴え続けた。物証がほとんどなく、自白に頼った捜査と裁判の結果、1955年には最高裁で平沢の死刑が確定したが、多くの弁護士・学者・ジャーナリストが冤罪であるとして世論を喚起したこともあり、平沢の死刑は何度からの危機はあったものの執行はされなかった。しかし、釈放されることもなく、平沢死刑囚は1987(昭和62)年に95歳で獄死するに至った。

### 『甲斐捜査手記』の存在への注目

名刺班による平沢逮捕に至る流れを先に記したが、実際の帝銀事件捜査は、特捜本部主力によって別の角度から大々的に進められていく。

帝銀事件に関してはこれまでに多くの記事・著作が刊行されてきた。それらは、真犯人を推理するもの、冤罪事件としての平沢貞通の無実を実証しようとするもの、捜査へのG・H・Qの介入を論じるもの、平沢の冤罪と人権侵害を訴えるものなど、種々様々である。私が2020年に刊行した『帝銀

事件と日本の秘密戦』は、正直に言って、これらの問題点について際立った「新説」を提起したもので、大胆な「推理」を展開したものでもない。

しかし、この本独自の特徴というものがないわけではない。本書の最大の特徴は、帝銀事件の特別捜査本部で、毎日の捜査員の捜査報告を書き留めていた捜査一課係長・甲斐文助の『甲斐捜査手記』全12巻およそ80万字の内容を分析し、特捜本部がどこに焦点を当てて捜査をしていたのかを明らかにしたことである。

1月26日の捜査開始から8月21日の平沢逮捕までに特捜本部において捜査員が報告したものを内容別に整理すると2020本になるが、そのうち最多が軍関係者に関するもので716本(35%)、その次が似寄り人物・投書などの情報に関するもので348本(17%)、その次が地取り・足取りに関するもので240本(12%)であった。ちなみに、名刺関係は、81件(4%)である。これだけでも特捜本部の関心が軍関係者に向けられていたことがわかるが、とりわけ重要なのは、軍関係のどのような部隊・機関が捜査の対象となっていたのか、という点である。これまでも731部隊(関東軍防疫給水部)関係者の関与が指摘されることは多かったが、特捜本部が捜査対象とし

たのは実に32部隊・機関に及んでいたのである。

### 特捜本部が肉薄した日本軍の秘密戦部隊

帝銀事件の捜査は、結果として言えば、日本陸軍の秘密戦の全貌を解き明かすものであったといえる。ここで言う「秘密戦」とは、化学戦(毒ガス戦)・生物戦(細菌戦)といった広義の秘密戦と狭義の秘密戦である謀略戦(暗殺・謀略)を含んだものである。捜査対象となった主な秘密戦部隊は以下の通りである。

- 化学戦部隊：陸軍習志野学校、第六陸軍技術研究所(六研)、陸軍糧秣廠、関東軍化学部(516部隊)、526部隊、陸軍第二造兵廠忠海製造所(大久野島)
- 生物戦部隊：関東軍防疫給水部(731部隊)、中支那防疫給水部(1644部隊)、関東軍軍馬防疫廠(100部隊)
- 謀略戦部隊：第九陸軍技術研究所(九研Ⅱ登戸研究所)、陸軍中野学校、特務機関、新京特設憲兵隊(86部隊)、東京憲兵学校中野実験隊、特設憲兵隊

これらの部隊は、毒ガス・毒物や細菌などによって人を殺害する手段を研究・開発していたもので、ほとんどの部隊がその研究過程で人体実験を行ない、実戦部隊においては組織的な生物化学兵器の使用や毒殺

を実施していたのである。

軍関係者に関する報告は全部で716件であったが、1件の中で複数の部隊について報告する場合もあり、それらを部隊別に分けると755項目になる。部隊別に報告が多い順に示すと、①731部隊173回(軍関係報告の23%)、②九研Ⅱ登戸研究所95回(13%)、③六研94回(12%)、④1644部隊63回(8%)、⑤軍医学校50回(7%)、⑥その他38回(5%)、⑦516部隊32回(4%)、⑧習志野学校29回(4%)、⑨中野学校25回(3%)、⑩特務機関22回(3%)ということになる。731部隊・九研・六研の上位3

機関で362回(48%)を占めている。特捜本部主力の捜査員たちに最も怪しいと疑われたのが、これらの機関・部隊だったということになる。なお、九研とは、陸軍の謀報・謀略のための兵器・機材を開発していた登戸研究所(川崎)、六研とは、毒ガスの研究・開発にあたっていた第六陸軍技術研究所(新宿)のことである。

特捜本部主力は、ほぼ青酸ガス・青酸化合物に焦点を絞り、さらに「毒殺経験者」がいるということに注目して捜査にあたったのであるが、それでもこれだけの部隊・機関が洗い出されたのである。日本陸軍という組織が実に多くの秘密戦関係部隊が存在していたことが分かる。

戦後、731部隊に関する最初の研究書である常石敬一氏の『消えた細菌戦部隊』(海鳴社)と一般に広く731部隊の名前を知らせた森村誠一氏の『悪魔の飽食』(光文社)が刊行されたのがともに1981年であることを考えると、1948年という時点で、日本陸軍の秘密戦部隊・機関のほぼ全貌を捜査当局が明らかにしていたことに驚かされる。そもそも事件発生直後に、特捜本部主力とは別に秘密捜査班が設置されたのは、当時の警視庁刑事部長が、731部隊などの存在を知っていたからである。前出の成智班長は、次のように語っている。

二月一日の朝、私(捜査2課主任・成智英雄)は藤田(次郎)刑事部長に呼ばれた。部屋には部長以外、誰もいなかった。部長は声を落として、戦時中、大陸で生きた人間を、細菌や毒物の実験材料にしていた秘密部隊があったという、意外な情報を語った。

「米軍はその事実を知っていて、元隊員を戦犯にしないという条件と交換に、彼らに詳細なデータを書かせている。ソ連軍は、関係者の身柄引渡しを強く要求しているらしい。もし、元隊員が犯人として浮かび上がり、秘密部隊の事実がわかると、恐るべき影響がおこる。従ってこの捜査は極秘を要するので、君はこの一線に

捜査を結集し、一切の捜査報告は極秘として、直接、私に知らせて貰いたい」(2) 刑事部長は、ここにあるような懸念から秘密捜査班を作らせたのであるが、特捜本部主力も3月には軍関係に注目し出し、上述のような部隊・機関に迫っていったのである。

特捜本部が洗い出したこれら多数の部隊・機関の存在は、日本陸軍が、生物化学兵器を含む秘密戦をいかに重視していたかという事を明らかにすると同時に、陸軍という組織が末端に至るまで縦割りになっていて、それぞれの部隊・機関が必要に応じてバラバラに兵器開発を行なっていたことも示している。

## 捜査の行き詰まりとその原因

『甲斐捜査手記』の記述を分析すると、軍関係の捜査は、「1」キーパーソンが口をつぐんで情報(容疑者名)を出さなかったこと、あるいは、「2」犯行を犯しそうな人物が、年齢と人相(特に胡麻塩・短髪の髪型)に合致しなかったことで行き詰まったことがわかった。

キーパーソンが口をつぐんだのは、731部隊や登戸研究所関係者などが、ちょうど帝銀事件の捜査の最中に、GHQとデータを米軍に独占させる代わりに戦犯免責をす

るという「ギブ・アンド・テイク」(登戸研究所関係者の言)の取引をし、取引の結果、旧軍の秘密を捜査員にも話さないという約束を関係者がしたためである。こうした約束があるから話せない、と捜査員に語った731関係者もいたことが『甲斐捜査手記』に記されている。また、GFQの手先となつて有末精三(元参謀本部情報部長・中将)などの旧軍の有力者が暗躍していたこともわかる。GHQと結びついているこれら旧軍関係者に睨まれれば、たちまち「戦犯」にされてしまう恐れもあるのだから、旧軍関係者は口をつぐむしかなかったのだ。

捜査末期の7月以降、具体的な容疑者名が出てこなくなるが、少からざる旧軍関係者が捜査員に対して、謀略戦にかかわる特務機関員などは、年齢・人相を秘匿するために高度な変装術を修得していたと証言していることが『甲斐捜査手記』にも記録されている。しかしながら、捜査はそれに対応できていなかった。変装の可能性という障害を乗り越えられなかったことにより、軍関係の捜査は急速に行き詰まってしまったと言える。

## おわりに：戦後史の「分岐点」にある帝銀事件

帝銀事件そのものの「政治性」が問われ

ることは、GHQの捜査介入という次元で論じられることはあつて、社会的な事件の背景にある「政治性」という点では、帝銀事件の翌年1949年に起こった国鉄をめぐる3怪事件(下山・三鷹・松川事件)ほどは強調されていない。国鉄をめぐる3怪事件は、ドッジラインのもとでの「逆コース」の始まりと指摘されることが多い。しかし、「逆コース」の地殻変動は、すでに1948年の帝銀事件の捜査の過程において起こっていたのである。1948年前半といえば、A級戦犯裁判もBC級戦犯裁判も進行中であり、一方では捕虜虐待の容疑で死刑判決を受ける戦犯も出ている同じ時期に、他方では捕虜を虐殺したことが明白な人々が免責されるという全く正反対のことが行なわれていたのである。帝銀事件の捜査とその幕引きは、この占領政策のダブルスタンダードという戦後史の「分岐」を明らかに示したものであるといえよう。

注

(1) 成智英雄「平沢貞通、無罪」の確証、遠藤誠「帝銀事件の全貌と平沢貞通」(現代書館、2000年)363頁。初出は、『新評』(新評社、1972年10月号)所収。

(2) 同前。

(やまだ・あきら)／明治大学平和教育登戸研究所資料館長